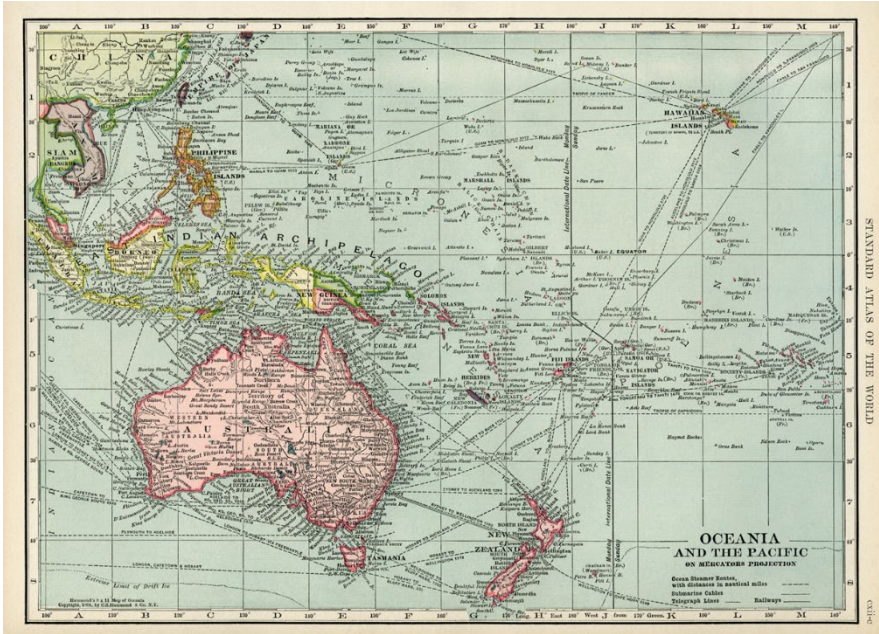
国際社会学部―オセアニア地域

海と冒険の世界で「常識」を問い直す

「海と冒険の世界」オセアニアは、大きくは**オーストラリア大陸と「島嶼部」**に分けられ、「島嶼部」はさらに**メラネシア、ミクロネシア、ポリネシア（ニュージーランドを含む）の 3 つ**に区分されます。

オーストラリアは先住民との和解と共に様々な移民を加えた多様な文化の共生を目指す活力に富んだ国です。また、一見「小さな」島々が点在しているように見える島嶼部は海によって繋がり、「国境」を超えて豊かな人やモノの行き来のネットワークでつながれてきた海の世界です。一見なじみが薄いようにも思われるオセアニアですが、実際は時差も少なく、日本との歴史的な関わりも深い地域です。この地域を理解するには、従来の「大陸的」、「近代経済的」視点から離れた新たな理解力と想像力が必要になります。現代の流動的な世界を生き抜くのに重要な視点の転換を与えてくれる地域と言ってよいでしょう。

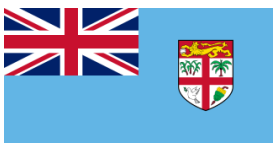
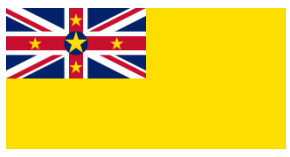


オセアニアは、オーストラリア大陸と無数の島から形成される「海の世界」
(By Sam Kai: https://www.publicdomainpictures.net/jp/view-image.php?image=461916&picture=-)

オセアニア地域コースには必修の言語が 2 つあります。1 つ目はオセアニア地域で幅広く話されている**英語**です。そして、英語に加えて、**フランス語、中国語、インドネシア語、マレーシア語、フィリピン語（タガログ語）**というオセアニア地域と歴史的・言語的・社会的に関わりの深い言語の中から 1 つを選択して学習することになります。この他に、地域の政治、社会、経済、歴史、文化などの基礎的な事項を学ぶ地域基礎の授業があります。地域基礎では、**「オーストラリア・ニュージーランド」、「メラネシア」、「ポリネシア、ミクロネシア」**と地域区分に分けて学んでいきます。

オセアニアで国連に加盟しているのは、オーストラリア、キリバス、サモア、ソロモン諸島、ツバル、トンガ、ナウル、ニュージーランド、バヌアツ、パプアニューギニア、パラオ、フィジー、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦の 14 か国です。その他のいくつかの地域は、他国（主に先進国）の領土の一部となっているか、主権の一部を他国に委譲しています。例えば、ニューカレドニアや仏領ポリネシア、ウォリス・フツナはフランス領であり、グアムや北マリアナ諸島、米領サモアはアメリカ領です。クック諸島とニウエは外交や国防などの一部の主権をニュージーランドに委譲しています。しかし、太平洋島嶼国を含む多くの国はクック諸島とニウエを独立国家として認めており、日本も両国と外交関係を持っています。このように、「国のあり方」ひとつをとっても、オセアニアが複雑で多様性に富む地域であることが分かります。

日本が外交関係を持つオセアニア 16 カ国の国旗

オーストラリア	フィジー 	キリバス	マーシャル諸島	ミクロネシア連邦	ナウル
ニュージーランド	パラオ	パプアニューギニア	サモア	ソロモン諸島	トンガ
ツバル	バヌアツ	クック諸島	ニウエ 		

太平洋諸島フォーラム

地域の政治的、経済的な諸課題を首脳レベルで討議する場であり、オセアニアにおける地域協力の中心です。「パシフィック・ウェイ」と呼ばれる調和とコンセンサスによる意思決定をベースとしたやり方で、地域的な課題に対して協力して取り組んでいます。16 の国・地域が参加し、事務局はフィジーの首都であるスバに設置されています。

フィジーで開催された第51回PIF首脳会議
（Penny Wong's Twitter: https://twitter.com/SenatorWong/status/1546798264003235841）

オセアニアの自然と地理

オーストラリア

オセアニアの陸地面積の大半を占めるオーストラリアは、地理的にも気候的にも多様性に富んでいます。植生や動物相も豊かで、カンガルーやコアラに代表される有袋類など、ここでしか見ることのできない動植物も多く生息します。起伏が少ない大陸で、中央には砂漠が広がっており、ウルル（かつてはエアーズロックと呼ばれました）がそのほぼ中央に鎮座しています。シドニーやメルボルンのある海岸部は温帯で過ごしやすく、クイーンズランド州にはグレートバリアリーフなど、美しいサンゴ礁の海もあります。

島嶼部

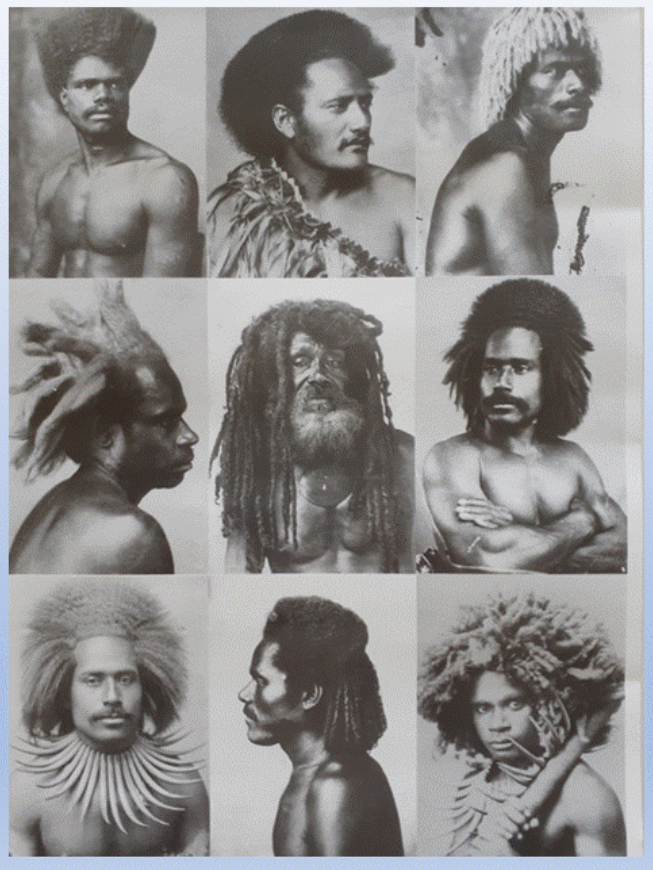
ニュージーランドやハワイ、メラネシアの国々は火山島で、陸地面積が広く鉱物資源も豊富です。パプアニューギニアの主要島であるニューギニア島は世界で 2 番目に大きな島であり、高地地帯には 4000 メートル級の山がそびえています。一方、ミクロネシアには珊瑚が隆起して形成された環礁島が多く、こちらは海抜が高くても数メートル程度です。近年では、温暖化の影響による海面上昇やサイクロンの被害にもっとも直面している地域として言及されることが多くなっています。火山島が多く、比較的国土が大きいメラネシアでも人口は数十万程度であり、ミクロネシアやポリネシアの人口は数万人から 1 万人を下回るところもあります。

オセアニアの人々と言語

パプアニューギニア　ファス村の人々（写真提供：柴田博之）

オーストラリア先住民の人々

Wikimedia Commons CCBY 3.0 (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Aboriginal_Australians_montage.jpg)



メラネシアの人々　（写真提供：片岡真輝）

オセアニアへの人類の拡散はおよそ 6 万年前に始まるとされており、氷河期の時代に東南アジア（スンダ大陸と呼ばれます）から、オーストラリア大陸、タスマニア島、ニューギニア島が陸続きになっていた大陸（サフル大陸）に海をわたってやってきました。この時期にオセアニアに進出してきた人々は、オーストラロイドと呼ばれ、現在のソロモン諸島の一部まで進出しました。その後、紀元前 1500 年ごろに新石器文化を持つオーストロネシア集団がニューギニア島からメラネシアを抜け、トンガやサモアなどのポリネシアへと拡散していきました。ミクロネシアはこのようにして拡散した人々の一部や東南アジアから直接やってきた人々などがミックスした世界です。この多層的な人の移動から、現在のオセアニアには多様な文化や言語が存在しています。

ニュージーランドには、子ども向けのマオリ語の本がある（写真提供：片岡真輝）

オセアニア地域の特徴のひとつは言語数の多さです。オセアニアには 1200 を超える言語があり、そのほとんどがメラネシアに集中しています。その中でもパプアニューギニアがもっとも多く、なんと 800 を超える言語があると言われています。同じメラネシアに位置するバヌアツには 100 程度の言語が、ソロモン諸島にも 80 程度の言語があります。一方、北はハワイから南はニュージーランド、東はイースター島まで広大な面積を擁するポリネシアには言語的な多様性が見られません。何千キロと離れた島嶼間でも意思の疎通ができるくらい言語が似ているのです。

イギリスの植民地だったところでは、独立後もそのまま英語が公用語になっています。また、メラネシアでは多様な言語が存在することから英語をベースにしたピジン・イングリッシュが発展し、これが日常的な言語として普及しています。ニュージーランドは欧州系が多数派を占めており、一般的には英語が話されますが、先住民マオリの言語であるマオリ語も公用語になっています。マオリ語は学校教育でも教えられますし、公共機関の案内にはマオリ語が併記されています。しかし、その一方でオセアニアにおける多くの先住民の言語が危機的状態にあります。例えばオーストラリアでは 250 ほどあったとされる先住民の言語のうち、今でもコミュニティレベルで使用されているのは 13 程度と言われています。

オセアニアの「都市」

シドニー

オペラハウスとハーバーブリッジというオーストラリアのシンボルを擁するのが**シドニー**です。1788 年にアーサー・フィリップが現在のシドニーに上陸したことで、入植が開始されました。シドニーは、今日にいたるまで多くの移民を引き寄せながら、多文化主義国家の中核都市として発展してきました。

　都市のほとんどが沿岸部に位置するオーストラリアですが、オーストラリアらしい赤土の砂漠と現地の先住民の文化を実感できるのがアリススプリングスとウルルです。アリススプリングスはオーストラリアのほぼ中央に位置する都市で、現地の先住民の伝統的な生活や芸術が身近に感じられます。ウルルは人気の観光地ですが、先住民の聖地としても重要です。2021 年からは、ウルルを聖なる地として尊重する観点から、観光客がウルルに登ることが禁止されました。

人口が数万から数十万の**太平洋島嶼部**では、オーストラリアのシドニーやニュージーランドのオークランドのような、いわゆる都市というものがありません。地方に在住する人々は、共同体で管理する土地で主食となるタロイモやヤムイモを栽培し、家畜や魚を獲ってくるなどの半自給自足的な生活をしています（これをサブシステンス経済と呼びます）。一部の作物は市場などで売られ、その収入で他の食料や教育費、医療費が賄われています。

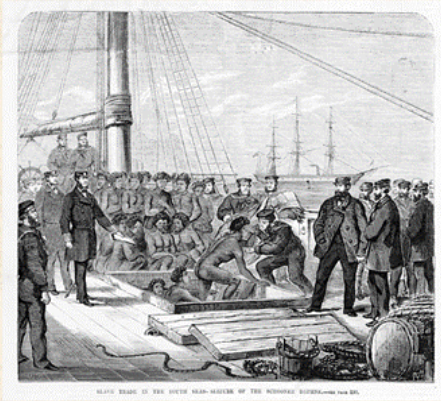
　フィジーの伝統的な家屋はビュレと呼ばれます。間口が大きく屋根がとがっているのが特徴で、屋根は葉や草で覆われています。この他にも、パプアニューギニアの伝統的な高床式住居など、オセアニアには多様な居住文化が見られます。

　ミクロネシアは、サンゴ礁が環状に堆積して形成された環礁島が多いのが特徴です。第一次世界大戦以降から第二次世界大戦終戦までは、この地域の環礁島の多くを日本が南洋群島として統治していました。

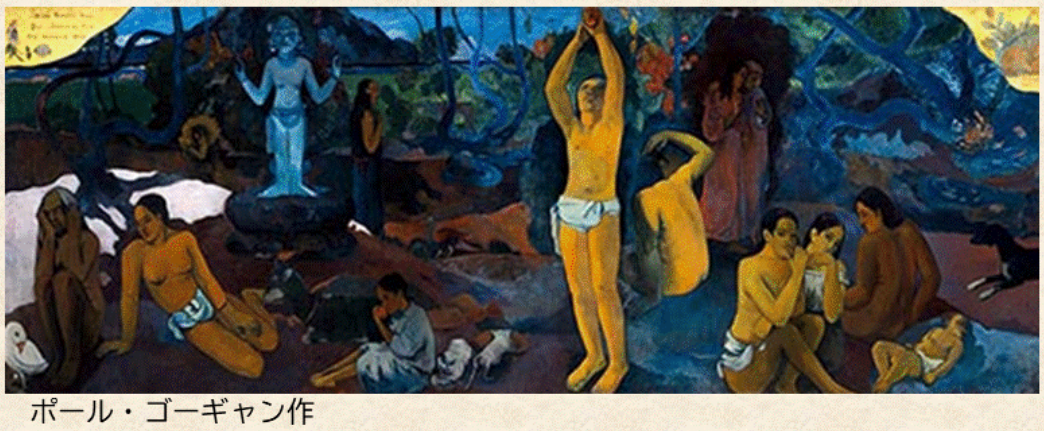
　陸地面積が少ない環礁島は起伏がなく、高いところでも海抜が数メートルしかありません。その魅力は、透明度が高く海洋生物が多様な美しいサンゴ礁の海にあります。そのため、人口数万のミクロネシア諸国に、人口以上の観光客が訪問しています。

　ミクロネシア地域では日本による植民地化や米国が核実験を行ってきた歴史もあります。第二次世界大戦後に米国の信託統治領となったマーシャル諸島のビキニ環礁やエニウェトク環礁では、合計 67 回の核実験が行われ、放射能汚染による健康問題や環境破壊により、多くの人々が影響を受けました。近年では、気候変動による海面上昇や台風の巨大化の影響を強く受けている地域として、関心が高まっている地域です。

植民地から独立国家へ



プランテーション労働者として奴隷狩り（ブラックバーディング）が行われたり、インドから契約労働者が連れて来られたりしていた
（右写真：https://girmitiya.girmit.org/new/. 左写真：Wikimedia Commons Public Domain (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Seizure_of_blackbirder_Daphne.jpg)）



ポール・ゴーギャン作
『我々はどこから来たのか、我々は何者なのか、我々はどこへ行くのか』

ヨーロッパ人のオセアニアへの進出は 16 世紀ごろと他の地域に比べて遅れていました。その理由は、広大な太平洋を航海するのが当時の航海技術と海洋知識では難しかったからです。探検家で有名なジェームズ・クックがオーストラリアの東海岸に上陸したのが 1770 年であり、以降、ニューサウスウェールズやビクトリア、クイーンズランドなどの植民地がオーストラリア大陸に成立しました。その他の島嶼部の植民地化はさらに遅く、フランスがタヒチを植民地化したのが 1842 年、フィジーがイギリス女王に領土を割譲したのが 1874 年、マーシャル諸島がドイツ領に編入されたのが 1885 年です。

植民地時代には、オセアニアの島々で交易とプランテーション経済が発展しました。いくつかの植民地ではプランテーションが設立され、砂糖やコーヒー、綿花、コプラなどが生産されました。現地の先住民がその労働力として利用されることもありましたが、ブラックバーディングと呼ばれる奴隷労働に似た契約労働システムが採用された地域もありました。また、フィジーではサトウキビ・プランテーションの労働力として多くのインド人労働者が移住してきました。現在のフィジーでは人口の 35%程度がインド系ですが、彼らの多くは、植民地時代に移住してきた労働者の子孫です。このように、植民地化により人口動態が変わり、一部の地域では伝統的な文化が失われるなどの変化が生じました。

独立国家への歩み

フィジーの独立の様子（1970年10月10日）
（Te Ara, The Encyclopedia of New Zealand. "Fijian independence Celebrations, 1970." https://teara.govt.nz/en/photograph/36870/fijian-independence-celebrations-1970）

現在のオセアニアの国々の多くが独立したのは、1960 年代以降と、世界の他の地域と比べると遅い方でした。1962 年に西サモア（現在のサモア）とニュージーランドが独立したのを皮切りに、1970 年代から 80 年代にかけて相次いで独立が達成されました。

オーストラリアとニュージーランド、そしてパプアニューギニアを除き、多くの島嶼部は、国土面積が小さく、資源も限られていることから、独立国家として自立するには大きな制約があります。そのため、宗主国との間で特別な関係を維持し、経済支援を受けるなどの方策が取られているところもあります。マーシャル諸島、パラオ、ミクロネシア連邦は、アメリカからの独立に際して自由連合協定をアメリカと締結し、国防の権限をアメリカに委ね、米国軍基地の建設を認めるかわりに経済支援を受ける取り決めを結んでいます。また、クック諸島とニウエは、一部の主権をニュージーランドに委譲しており、ニュージーランドとの間で特別な関係を構築しています。

また、ニューカレドニアやフランス領ポリネシアなど、独立をしていない地域もあります。

オセアニアにおける気候変動問題

脱炭素を求めて活動するオセアニアの気候変動活動家たち
(350 Pacific Facebook Photopage: https://www.facebook.com/350Pacific/photos)

温暖化の主な原因である二酸化炭素の排出について言えば、オセアニアの島嶼部は世界の国々に比べたら排出量に占める割合は無視できるくらい小さなものです。しかし、温暖化の影響をもっとも受けているのは太平洋島嶼国なのです。

近年、気候変動対策における太平洋島嶼国の存在感が高まっています。フィジーの COP23 議長国やツバルのコフェ外務大臣による「海につかったスピーチ」が話題になるなど、島嶼国家の国際的なプレゼンスは確実に高まっています。これは、これまでの国際関係にはなかった注目すべき変化です。

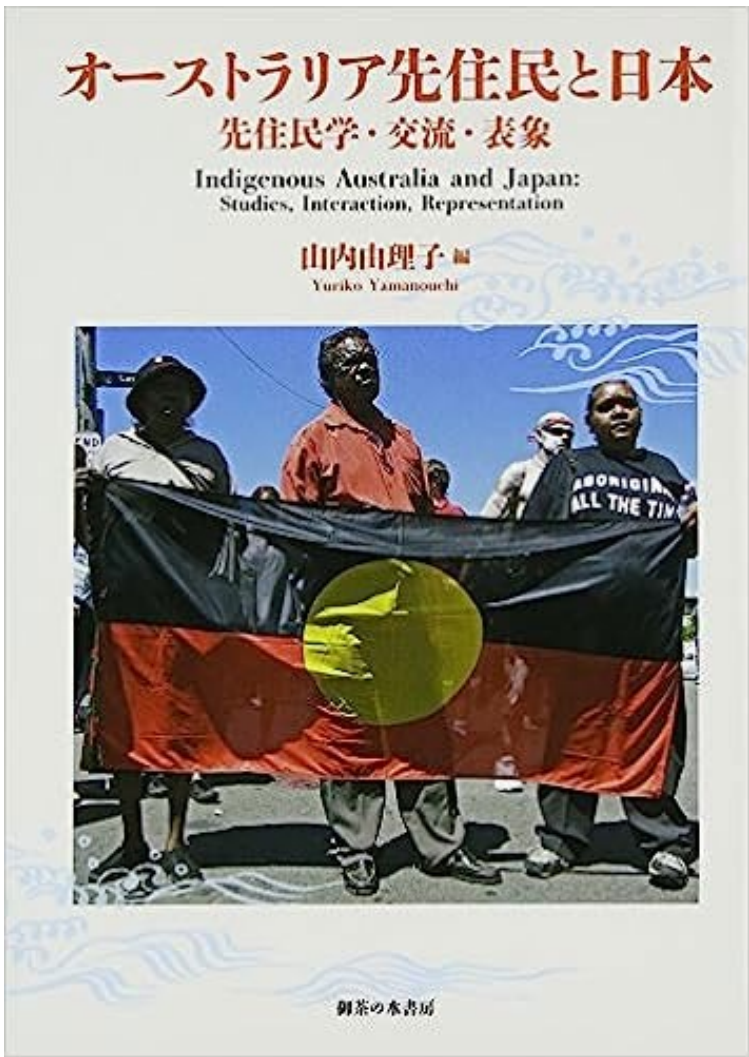
年々深刻化する影響

気候変動問題は世界的な課題ですが、陸地面積が小さく資源が限られるオセアニアの島嶼部ではその影響がより深刻になります。特に環礁島が多いミクロネシアの島々では、海面上昇による沿岸部や低地への海水の浸水や塩害により、人々の生活基盤に大きな影響が出ています。

サイクロン（台風）の巨大化による家屋の倒壊やインフラの破壊が頻繁に起こるなど、現地の人々に甚大な被害がもたらされています。また、環礁島では雨水が重要な水資源になりますが、干ばつが続くと水不足が深刻化します。

ツバルのコフェ外務大臣によるCOP26に向けたスピーチ
海に入ってのスピーチは世界で話題を呼んだ
(Ministry of Justice, Communication and Foreign Affairs, Tuvalu Government: https://www.facebook.com/watch/?v=1013681669232418)

東京外国語大学教員によるオセアニア関連の書籍



■ 山内由理子（編）（2014）
『オーストラリア先住民と日本―先住民学・交流・表象』
御茶の水書房

オーストラリア先住民に関する
研究を網羅した論文集

みなさんは、日本人がオーストラリア先住民について知ることにどのような意味があると感じるでしょうか。本書は、単なる研究紹介にとどまらず、オーストラリアにおいて先住民研究の蓄積がなされている中で、あえてそれを日本人が研究する意義を問う視点から編集されています。学問や知識、興味はどのように生み出されて、我々に何を教えてくれるのかを、オーストラリア先住民と日本との繋がりから考える研究書です。